

紫式部『源氏物語』 第九帖【葵】より

訳…◆与謝野晶子◇谷崎潤一郎
構成・脚色：studio_03

◆天子が新しくお立ちになり、時代の空気が変わってから、源氏は何にも興味が持てなくなっていた。官位が大将に昇進した窮屈きゆうくつさもあって、忍び歩きももう軽々しくできないからである。

◇その頃、六条の御息所みやすじしろと先の皇太子との間にお生まれになった姫君が、(天皇の名代として伊勢神宮に奉仕する役目である)斎宮さいぐうにお立ちなされました。

御息所は、源氏のお心持ちも一向にあてにならず、不釣り合いなお年の違いもきまり悪く思い、幼い姫君をはるばる遠くの地へお遣わしになる頼りなさにかこつけ、自分も一緒に伊勢へ下って行こうかと思っておいででした。

◆一方、左大臣家あおひにいる葵の上あおいは(源氏の子を)妊娠にんしんしていて気分が悪く、心細い気になっていた。源氏の心が幾つにも分かれているのを憎みながらも、「他での恋愛を隠そうともしない人には、恨みを言っても言いがない」とも思っていた。
しかし当の源氏は、わが子の母になろうとする葵の上に、また新しい愛を感じ始めていたのでした。

◇(そんな折、賀茂の祭りが盛大に催されました)

御禊みそぎの日には、供奉くぶの上達部かんだちめのお伴ともたちとして、容姿の美しい方ばかりが選えりすぐられ、下重ねの色、表の袴の紋、馬、鞍までもみな整えられました。
また格別の勅命ていめいによって、源氏の君もお伴ともなさいます。
一条の大路は隙間もなく、物凄ものすごいいまでの賑わいでした。

◆葵の上は、そうした所へ出かけるようなことはあまり好まなかったが、母君が「今日はおちようどあなたの気分もよくなっていることだし、お付きの女房たちも物足りなく思うでしょうから、行っていらっしやい」と、お言いになった。

それewithにわかに、御禊みそぎの行列ものみぐるまの物見車ものみぐるまの人となったのである。

◇(通りは)牛車ぎしやが割り込む余地もなく立ち並んでいますので、花やかな装いをした

その行列が、進むこともならず立ち往生してしまいました。そこで、雑人どもものいな隙間を見定めて、その辺の車を残らず立ち退かせようとなりました。すると「これは決して、さように押しつけられるような御車ではない」と強情に言い張るのです。

◇（外見は）網代車のすこし古びて、下簾の様子などが由緒ありげなのに、たいそう人目をばかりながら奥の方へ乗っているらしく、ほのかに見える袖口、裳の裾、汗疹など、ものの色合いも小ざっぱりとして、ことさら目立たぬように窶した気配なのです。

これぞ齋宮のおん母御息所が、物思いのあまり憂き晴らしにもなろうかと、忍んでお出かけになった御車なのでした。

◆「それくらいのことではいばせないぞ、源氏の大将さんの引きがあると思うのかい！」と、御息所の車は葵の上の女房が乗った幾台かの車の奥へ押し込まれ、大臣家の車を前へ立て並べられて、何も見えないことになった。

車を据える台の脚なども皆折られてしまい、御息所は、お忍びの姿が誰であるかを見明かされ、このようにののしられていることが口惜しくてならなかった。

◆そのうちに、「見えて来た！」と言う声があった。行列が来たのである。それを聞くと、さすがに恨めしい人の姿が待たれるというのも恋する人の弱さではなからうか。

当の源氏は、御息所の来ていることなどは少しも気がつかないのであるから、振り返るはずもない。

しかし葵の上の左大臣家の車は一目で知れて、この一団の車には源氏もきわめて敬意を表して通ったのである。

◇御息所は涙がこぼれ落ちますが、「まばゆいような源氏の君のお姿の、晴れの場ではひとしお立ち勝っておられますのを見なかったら、やはり残念だったであろう」とお思いになります。

お伴の者どもも容貌麗しく、身なりもきらびやかに整えていましたが、こんな具合に世の人々にかしずかれていらっしやる源氏の君のおん有様は、草木もなびかぬものはないようなのでした。

◆御息所の煩悶はんもんはもう過去何年かの物思いとは比較にならないほどのものになっていた。信頼できるだけの愛を持っていない人、と源氏を決めてしまいなながらも、別れて伊勢へ行ってしまうことは心細いことのようにも思われたし、捨てられた女と世間から見られたくもない。全然無視された車争いの日の記憶に、寝てもさめても煩悶するせいか、次第に心がからだから離れて行き、自身は空虚なものになり、病気のようになった。

◆その頃、葵の上は物怪もののけがついたふうの容体で非常に悩んでいた。

源氏も心配し、修法しゅほうや祈祷きとうもいろいろとさせていた。(すると)物怪いぎりょう、生霊いきりょうというよなものがたくさん出て来て、中に、ただじっと病む葵の上に添い、はげしく病人を悩ませようとするのでもなく、片時も離れない物怪が一つあった。

どんな修験僧しゅげんそうの技術でもお祓いすることのできない執念は、並み並みのものであるとは思われなかった。

◆葵の君の容体はますます悪くなり、「これは六条の御息所の生霊である」「いや、その父である亡くなった大臣の亡霊うわさが憑ついている」という噂うわさが聞こえて来る。御息所は自身なげの不運のろを歎なげくほかに人を咄のろう心などはないが、物思いがつのればからだから離れることがあるという魂たまは、あるいはそんな恨みを告げに源氏の夫人の病床へ出沒するかもしれないと、悟さとられることもあるのであった。

原文 すこしうちまどろみたまふ夢には、かの姫君とおぼしき人の、いときよらにてある所に行きて、とかく引きまざるり、うつつにも似ず、たけ猛くい かきひたぶる心出い来て、うちかなぐるなど 見えたまふこと、たび度かさなりにけり。

◆（御禊の日の屈辱感から燃え立った恨みは自分でももう抑制のできない火になってしまったと思っている御息所は、）

ちよつとでも眠ると見る夢は、姫君らしい人が美しい姿ですわっている所へ行つて、その人の前では乱暴な自分になって、武者ぶりついたり撲なぐつたり、現実の自分ではない荒々しきで、幾度となく同じ筋を見る。
情けないことに、魂がからだを離れて行ったのであろうかと思われるような、失神状態に御息所がなっている時もあった。

◇（物の数でもないように扱われたあの御禊みそぎの日の後に、一途に無念など思うあまりに心も上の空になって、静まり給うようもなかったせいかな、）
ちよつとでもうたたねをなさいますと、その夢の中で、あの姫君と覚しい人の美しい姿をしているあたりへ出かけて行つて、あちらこちらと引つ張り廻したり、うつつの時に似ぬ猛々しい、激しい、ひたむきな心を起して、打ちのめしたりするところを、ご覧になることが幾度もあったのでした。
ああ、浅ましい、わが魂がほんとうに身を捨てて行つたのであろうかと、何だか正気を失つたようにお感じになる折々もありました。

◇(そんな折) まだその時期ではないからと、どなたも気を許しておいでになりますと、にわかにお産の気がおつきなされて、お苦しみになりますので、いやが上にも御祈禱の数を尽くしましたけれども、例のしつこい おん物怪ひとつだけはどうしても動きません。それでも貴い験者どもが厳しく祈り伏せると、葵の上は泣き声を上げて苦しがり、「すこし(祈禱を) 緩めてください。源氏の君に申し上げることがあります」と仰せられます。

◇もうほんとうに臨終のようにお見えになりますので、遺言でもなさりたいことがおありなのかと、

◆几帳きじょうの垂れ絹たぎぬを引き上げて、源氏が中を見ると、葵の上は美しい顔をして、そして腹部だけが盛り上がった形で寝ています。

◇他人が見てさえ気が転倒しそうになるので、まして源氏の君が悲しく可哀そうにお思になるのも道理です。

◆白い着物を着ていて、顔色は病熱ではなやかにっている。たくさん長い髪は中ほどで束ねられて、枕に添えてある。

◇ほんに、こういう風に取り乱しておいでなされてこそ。可愛らしさやなまめかしさが加わって、かえって趣があるのだという風に見えます。

◇葵の上があまりはげしくお泣きになりますので、源氏が「何事もそう思い詰められてはいけません。きつとよくおなりになるでしょう。どんなことがあるうとも、夫婦は来世で必ず逢える時があると聞きますから、またきつとお目にかかれます。深い契りがある間柄は、どこへ行かれても縁がつながっているのですから」とお慰めになりますと、

◆「そうじゃありません。私は、苦しくてなりませんからしばらく法力をゆるめていただきたいとあなたにお願いしようとしたのです。私は、こんなふうにしてこちらへ出て来ようなどとは思わないのですが、物思いをする人の魂というものはほんとうに自分から離れて行くものですね」という声も様子も、葵の上ではありませんでした。

◇

歎きわび 空に乱るる わが魂を

結び止めよ 下がひの棲

下がひの棲とは、衣の裾部分の内側の端の方のこと、この時代にはここを結ぶと、魂が戻るという言い伝えがあったそうです。

とおっしゃる声音やおん気配は、全くあの御息所そのままなのでした。

◇（その時、几帳の外では）

「すこしお声がおしずまりになりましたので、いくらかお楽になられたのか」と、宮様がお薬湯を持ってお側へ寄っていらつしやり、人々が抱いてお起こし申し上げますと、ほどなくお産がおありになりました。

どなたもお喜びはこの上もないのですが、おん物怪どもの妬ましがってうろたえ叫ぶ気配も騒々しく、後産のことがまたたいそう心配でした。

◆六条の御息所はそういう取り沙汰を聞いても不快でならなかった。

「葵の上はもう危ないと聞いていたのに、どうして子供が安産できたのであろう」と、こんなことを思つて、自身が失神したようにしていた幾日かのことを、静かに考えてみると、着た衣服などにも祈りの僧が焚く護摩の香が沁んでいた。不思議に思つて、髪を洗つたり、着物を変えたりしても、やはり改まらない。

世間で言う生霊の説の否認しがたいことを悲しんで、人がどう批評するであろうかと、だれに話してみることでもないだけに、心一つで苦しんでいた。

◇（そんな秋の、官吏の昇任の決まる日のことでした）

御殿のうちが人少なに、ひっそりとなった時分に、葵の上はにわかにお胸を咳きあげて、たいそう激しくお悶えになり、そのよしをお知らせ申し上げるまでもなく、（息を）絶え入っておしまいになりました。

◇（葵の上の父である）大臣は立ち上がることもおできになりません。

「こんな老人になってから、若い盛りの子に先立たれて、悲観のあまり這い回ろうとは」と、身を恥じてお泣きになりますのを、多くの人がいたいたしくお眺め申し上げます。

◆夜通しかかったほどの大がかりな法事であったが、終局は煙にすべく遺骸を広い野に置いて来るだけの寂しいことになって、みな夜が明けるところに帰って行った。

八月の二十日過ぎのありあけつき有明月のあるところで、空の色も身にしむのである。

亡き子を思つて泣く大臣の悲歎に同情しながらも見るに忍びなく、源氏は車中から空ばかりを見ることになった。

◇

のぼりぬる煙はそれと分わかねども

なべて雲居の哀れなるかな

雲居とは、雲の居るところの意味で、空のこと

遺骸を焼いた煙が立ち昇つて雲になる。

下から見ると、どの雲がその煙だか分からないけれども、空全体がしみじみとあわれに感じられる。

つづく

底本…「與謝野晶子 訳 全訳源氏物語 上巻」角川文庫 角川書店
1971（昭和46）年8月10日 改版初版発行

「谷崎潤一郎 訳 新々訳源氏物語 卷二」中央公論社
1965（昭和40）年1月20日 初版発行